

教文 digital 通信 電子版

発行所 長野県教文会議

発行人 寺尾 真純

No.2 2020.6.18

1. 第1回総研「ジェンダー平等の教育を考える」総合研究会資料

内山由香里さん（岡谷南）

「夫婦別姓も選べる社会に！」

小池真実さん（元岡谷南高校）

聲山佐和さん（教文事務局）

「再び韓国ツアーを語る」

河西綾さん（教文事務局）

「民衆のダイナミズム、韓国へ」

第1回総合研究会は、

牟田和恵さん（大阪大学）をお招きしてジェンダー平等についてお話を聞く計画を立てました。残念ながら新型コロナウイルス感染症防止のために延期いたしました。年内にお招きしたいと思いますので楽しみにお待ちください。

新型コロナウイルス感染症による危機の中で、世界中でこれまでの社会の問題点が顕在化しています。ジェンダー平等の視点が、安全保障や気候変動などあらゆる国際問題を考える際に不可欠になる中、女性差別撤廃条約がますます重要になっています。さて、世界経済フォーラムによるジェンダー・ギャップ指数で、日本は153カ国中121位でした。政治・経済・教育・健康の4部門において、日本が大きく順位を下げた理由の一つは、女性の政治参加度の低さでした。

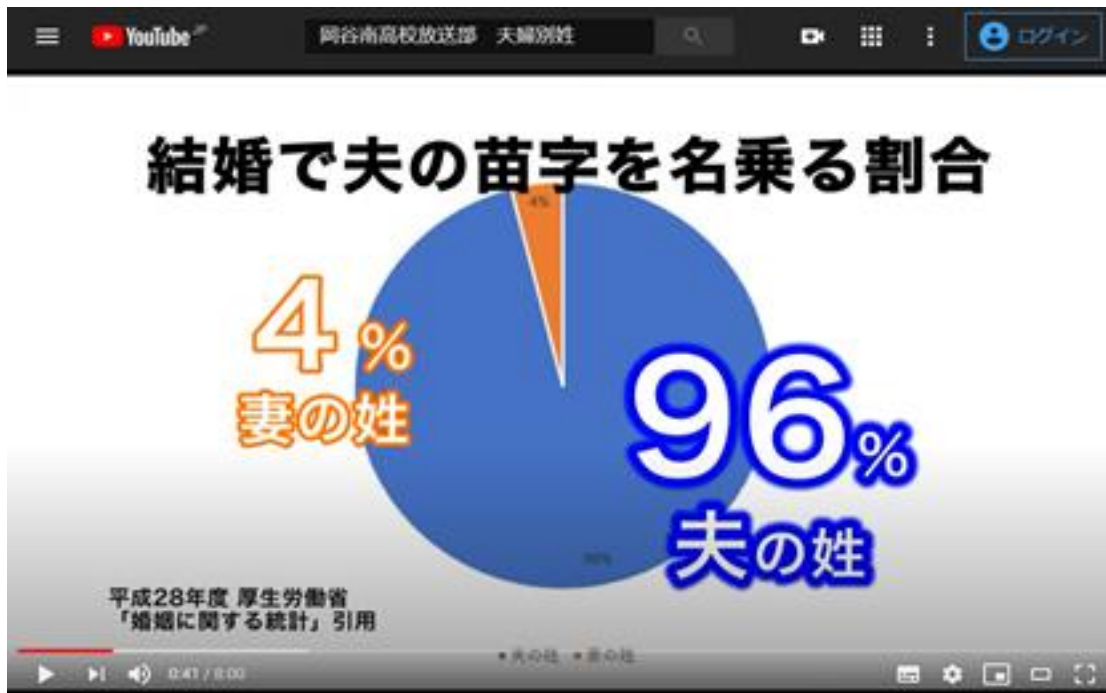
ジェンダー平等は学校、生徒、教職員の学校生活や生き方に直結する大切な視点です。ジェンダーについて学び、考えることは「とらわれ」から自由になり、多様性と人権、民主主義をより深く考えることにつながります。今の社会や教育、家族のあり方や課題をジェンダーの視点で問い直し学びあうことが大切です。

第1回総合研究会で、当日に報告していただくことになっていた方、内山由香里さんと小池真実さん、聲山佐和さん、河西綾さんの資料をご紹介します。

夫婦別姓も選べる社会に！

内山 由香里（元岡谷南高校）

「選択的夫婦別姓」というのは、文字通り、結婚する際に同姓が良ければ同姓に、別姓にしたければ別姓も選べるという制度です。現在の日本の法律では、法的には同姓が強制されており、法律婚をすると夫または妻のどちらかが改姓せざるを得ません。改姓した側は住民票・運転免許証・パスポート等がすべて戸籍名となり、健康保険証・給与・納税関係などの公的なものから銀行口座・クレジットカード・レンタルショップの会員証まですべて戸籍名になってしまいます。我が家は結婚した時から別姓でと合意し、私が改姓しましたが、名前は生まれた時から、自分そのもの。愛着のある名前が使えなくなるというのはショック以外の何物でもなく、どんどん戸籍名に自分が占領されてくるような気がしました。そこで夫と話し合い、子どもたちが生まれる前後にペーパー離婚を2度し、事実婚も経験しました。



こう書くとショッキングかもしれませんが、法律婚でも事実婚でも、夫婦や家族の関係には何の変化もなかったため、子どもたちは離婚していたことも最近まで知らなかったそうですし、生まれたときから別姓家族に育った彼らは小学校に入る頃まで「よその家は同じ苗字どうして結婚していると思っていた」そうです。私たち夫婦は、むしろ別姓のことを対等な立場でオープンに話し合うことで、お互いを理解したり、ともに努力して良い家庭を築いていこうとしたりすることができたのではないかと思います。

結婚して数年は「別姓です！！」と肩に力が入っていた私ですが、1996年に日弁連の法制審議会が国に選択的夫婦別姓導入に関わる民法改正案を答申してから24年。世論調査でも7割の賛成があるにもかかわらず実現しないことに、最近はあきらめていました。



昨春、顧問をする放送部の部員である娘から、「夫婦別姓のドキュメンタリーを作りたい」と言われたときも、今さら？という思いがぬぐえませんでした。完成した番組は全国大会で準決勝まで進みましたが、「決勝に残れなくて悔しい。もっとたくさんの人に知ってもらいたかった」という娘に、娘はこんなに頑張ってくれたのに、私は結婚以来、社会に対して何の働きかけもしてこなかったと反省しました。そこで子どもたちの世代にも同じ思いをさせたくないと思い、選択的夫婦別姓・全国陳情アクションに参加することにしました。アクションでは、クラウドファンディングを始めたほか、別姓家庭の子どもの声を国会議員に届けようということになり、2月、3月と公明党・超党派・自民党の議員勉強会に娘が参加し、意見を述べ、要望書を各党の代表に手渡してきました。メディアにも取り上げてもらい、新しい出会いも生まれ、私も仲間と一緒に県内の自治体や県議会に働きかけをしていく予定です。関心のある方、ぜひお声がけください。またよろしかったら、岡谷南高校放送部制作ドキュメンタリー「うちって変ですか？」(8分間) もご覧ください。<https://bit.ly/2StaWrf>

岡谷南高校 小池 真実

私の父は小池幸夫、母は内山由香里と言います。母は高校3年間所属した放送部の顧問でもあります。両親は結婚の際、お互いに苗字を変えたくなくて別姓で行こうということになったそうですが、別姓婚を選ぶことができなかつたため、日本の多くのカップルと同じように父の姓を選び、母は職場で通称使用をしていました。けれども運転免許証や保険証などが戸籍名になってしまうため、よりストレスなく別姓で生活できるようにと父が事実婚を提案し、長男である兄が生まれた後、ペーパー離婚をしました。子どもの名前は小池にしたかったため、その後、姉が生まれる前に再婚し、生まれた後にペーパー離婚、私が生まれる前も再婚し、現在はそのまま母の名前は戸籍上「小池」になっています。私にとっては生まれた時から母はずっと内山由香里なので、母が「小池」というのは知らない人のような不思議な感じですか。



幼いころから母の苗字が違う事には何の違和感も感じておらず、特に意識することもなく過ごしてきました。うちの兄妹は皆そうで、兄や姉は小学校に入る前くらいに、両親に「〇〇ちゃんのお家はお父さんもお母さんも△△って苗字なんだって！面白いね！」というようなことを言っていたそうです。私も周りの友達から何か言われたことはなく、別姓について裁判が行われていることや別姓への反対意見があるということも知らずに育ちました。

所属している放送部でドキュメンタリー番組のネタを探していたとき、たまたま我が家の別姓の話になったのですが、私には当たり前すぎて他の人がなぜ面白いのか初めはさっぱりわかりませんでした。けれども本格的に番組のテーマとして両親の夫婦別姓を取り上げたことで私も関心を持つようになりました。取材を進める中で、普通だと思っていた両親の別姓がそうではないこと、裁判になっていること、別姓に否定的な考えを持つ人がいること、海外の事情を知り、またインタビューで今まで知らなかった母の苦労や別姓に対する思いを聞きました。正直、ショックなこともありました。「別姓だと家族の絆が..」 「親が別姓だと子どもがかわいそう」という意見があることを知った時、私の家族は仲がいいと思うし、苗字が違うからといって不便な思いもしたことがないし、親が別姓だから嫌な思いをしたということも

ないので、同姓か別姓かということで家族の仲や子どもの気持ちを一方的に決められるのは違うのではないかと、嫌な気持ちになりました。「うちって変ですか？」というタイトルで完成した作品は NHK 杯全国高校放送コンテスト長野県大会で NHK 賞をいただき、夕方の県内のローカルニュースで放映され、全国大会でも入選することができました。夫婦別姓という生き方もあるということをしりでも多くの方に知ってもらえたかなと思っています。

SNS で旦那さんの苗字になることを喜んでいる人を見たことがあります。結婚したら同姓にしたい人がいると同時に自分の名前のままでいたい人がいます。私自身、結婚したらどちらにしたいか、まだわかりません。しかし、一つの選択肢として別姓があればもっと夫婦や家族の形が多様になり、多くの方が自分らしく生きられるのではないかなと思っています。

子どもにとって、家の中ではフルネームや苗字で呼び合うこともないので、親が同姓か別姓かということとはあまり問題ではありません。苗字が同じ方が絆は強いとか仲が良いということもないと思います。私の両親のような人たちのために夫婦別姓も選べるようになってほしいです。

(*この文章は昨年度の、小池さんが岡谷南高校3年生当時のものです。)

写真は以下の番組から転載しました。

動画は youtube でご覧いただけます。ぜひアクセスしてください。

長野県岡谷南高校放送部

第 66 回 NHK 杯全国高校放送コンテスト テレビドキュメント部門入選作品

「うちって変ですか？」(長野県岡谷南高等学校放送部)

<https://www.youtube.com/watch?v=LRy59jIC108>



選択的夫婦別姓 陳情アクション信州

梅雨のゆるっとお茶会 ～女性の「活躍」について 考えよう～

2020年6月28日(日)14:00～16:30
オンラインにて開催

男女共同参画週間に、
「女性活躍」を語り合いませんか。

女性にとっての「活躍」とは何でしょうか？
県内外で働く女性や議員の方々とともに、
ライフステージが変わっても女性が自分らしく働き、
暮らしていくための課題や必要なことを考えます。

お問い合わせ shinshu.chinjo.action@gmail.com

お申込み <https://forms.gle/6HGbtbEwFENN4JU3A>

QRコード▷



韓国ツアーの日程

(11月16～19日)

16日午後 ソウル着

タプコル公園

17日午前 ナヌムの家

午後 西ソデムン大門刑務所跡

大韓民国歴史博物館

18日午前 景福宮、光化門、同広場

日本大使館前少女像

午後 旧市街散策

「参与連帯」懇談

19日午前 民族問題研究所懇談

植民地歴史博物館

夜 羽田着

2019年11月16日～19日に、

「日韓市民連帯を開く旅」

と題して、長野県AALA（アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会）が主催したツアーが行われました。

日韓の市民レベルの交流を促進し、友好を深める目的で行われ、長野県各地から15名の参加があり、事務局の聲山さん、河西さんが参加しました。

2016年のロウソク集会を主導した、参与連帯事務局や植民地歴史博物館、日本大使館前の「平和の少女像」、日本軍「慰安婦」の方々が共同生活を送る「ナヌムの家」などを訪れ、現地の方々との交流を行いました。



再び韓国ツアーを語る

事務局 犛山 佐和

慰安婦問題も徴用工問題もその詳細はよくわからないけれど、行って話を聞けば少しは勉強になるかなという単純な思いと、韓国コスメは何を買おうかなか、おいしい韓国料理もたのしみだなあ、という思いを持ちつつ参加した。実際に 3.1 独立運動があった 탑골公園や、ナヌムの家、キャンドル革命の中心的役割をした参与連帯、親日派の人々を調べ展示している植民地歴史博物館、それぞれの方から話を聞いたり、ガイドさんの説明を聞いたりして、韓国コスメ、料理などのことはある程度知っていても、韓国で何が起こったのか、そして日本は何をしたのか、ということをおもにも知らな過ぎたことに反省と焦りを覚えたツアーだった。(韓国コスメは安くて効果があり、韓国料理はおいしく、満足はしたのだが。)

4 日間、多くの場所で話を聞いたのだが、一番印象が強かった場所は、元「慰安婦」だったおばあさん(ハルモニ)たちが共同生活をしている「ナヌムの家」だ。ナヌムの家で生活をしている李玉善(イオクソン)さんから当時の話を聞き、ナヌムの家でハルモニたちと暮らしながら、施設内にある歴史館のガイドをしている矢嶋さんから歴史館の展示品などの説明を受けた。

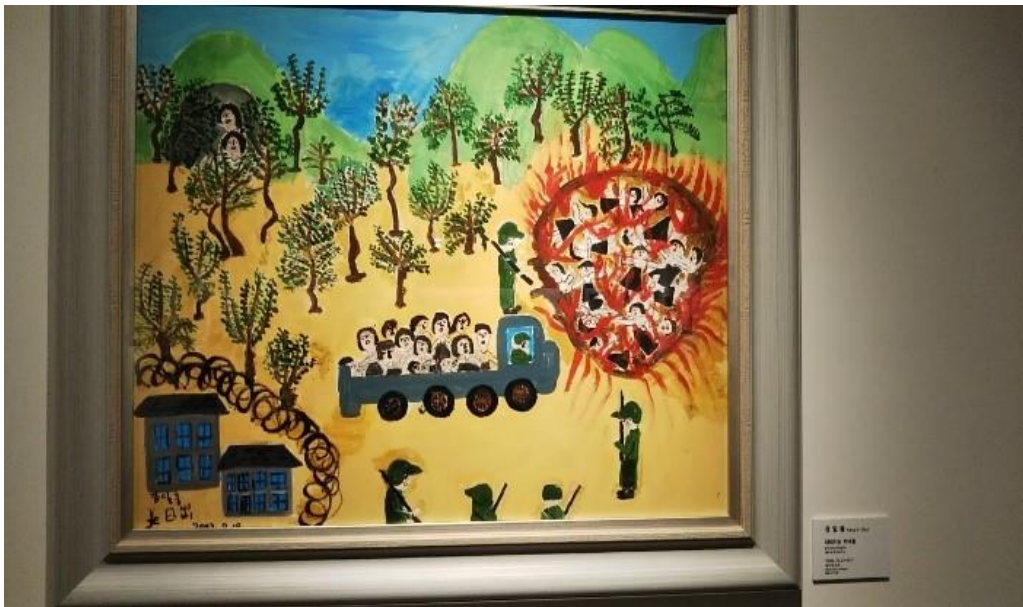


「ナヌムの家」李玉善さんと矢嶋幸さん

李玉善さんは 15 歳の時に連行されて、自分の意志とは関係なく、性奴隷として扱われた。「何度も同じことを話しているよ。」と前置きしてから、「過去を否定している日本、誰にこの怒りをぶつければいいのか、ちゃんと政府が謝罪をするように、皆さんが動いてください、戦争がなく、人が幸せに暮らせるように政治を変えてください。」と話した。そして、当時の自分がどう扱われていたか、周りの仲間がどうされたかということをお話してくれた。日本の敗戦後、地元に戻るお金もなく、戻ったところでキズモノとされ、自身もそれを感じ生きてきたことを話してくれた。慰安婦としては解放されたが、精神的にも肉体的にも解放されることなく、痛みを抱えながら生きてきたということは、想像してもしきれない。はじめに発した「何度も同じことを話しているよ」というのは、苦しい記憶を何度も話しているということだけではなく、同じことを何度言っても謝罪をしない、何も変わらない日本の政府に対する怒りもあるのだ

ろう。時間にして5分程度の話だったが、李玉善さんの声は今も耳に残っている。

歴史館にはハルモニたちの身に何が起こったのか、日本軍が何をしたのか、という展示だけでなく、ハルモニたちの遺品や、ハルモニが描いた絵画の展示もあった。矢嶋さんは、ガイドの最後に、慰安婦問題とは、①歴史（明治以降日本の侵略）、②政治（私たちが主権を持っている国の政府が謝罪しない、日本は政治を変える必要があり、そのために私たちは何をすべきか）、③女性の人権（韓国の#metoo運動と日本のそれとの違い、女性が声を上げようとするすると押しつぶそうとする人がいる）、のテーマを内包している、戦時中だけの問題ではなく、今も続く問題だと言っていた。



「ナヌムの家」に展示してある元日本軍「慰安婦」の方の描いた絵

日本の植民地支配がどう朝鮮の人たちを分断して苦しめ、今もその問題がどう続いていて、解決されないままなのか、ということをごきちんと知らないといけない。慰安婦問題も徴用工問題も国家間の賠償問題だから、と言って知ろうとしないのではなく、これらは女性問題、人権問題として自分の課題として思いを巡らせなければならない。

外国人労働者として海外から人を連れてきて、日本で生きていくための保証もせず、低賃金で働かせている今の日本は、植民地支配をしていた昔と同じことを繰り返している、日本の本質は変わっていないと、強く感じた。何も変わっていないし、変えることができていない。ハルモニの「何度も同じことを話しているよ」という言葉は、「変えられない私たち」に対する怒りの言葉だったのだと思った。

慰安婦問題・徴用工問題、外国人労働者など国家間や政治の問題とされていることを、自分の問題として捉えたとき、自分の中に植民地化した日本と同じような加害性はないか。少数派に対する勝手なイメージ（自分たちと違うものを異物とすること）が差別や誤解を生じさせるのではないか。なぜ自分と違うのか理解する視点を持たない限り、また同じことの繰り返し、「変えられない私たち」のままだ。

韓国の人たちが差別と抑圧の中でどう戦ってきたのか、キャンドル革命を成し遂げた韓国の人たちの声のあげ方など、私たちが学ぶことはたくさんあると思った。今回のツアーで学んだこと、その後勉強したことを単なる知識に終わらせず、自分の中の加害性を認め、（個人のレベルであっても）どう他国の人と関係をつくるのか、そういったことを考えるきっかけとなるツアーであった。

民衆のダイナミズム、韓国へ。

事務局 河西 綾

「ストリート・デモクラシー」の韓国

2016年12月、幸運にもわたしは、韓国ソウルの光化門広場で行われていた「ろうそく革命」の現場に居合わせることができた。朴槿恵大統領弾劾、セウォル号事件の国の対応を糾弾するために集まった市民が、12月のソウルの酷寒の中、ろうそくを手に光化門広場を埋め尽くしていた。集まった民衆の中には子どもを連れた家族の姿が多く、そのことがとても印象的だった。

この歴史的な「ろうそく革命」の場に居合わせるといふ幸運に恵まれたのは、忠清南道・洪城郡にあるブルム学校や、ソウルの住民たちが設立・運営しているソンミサン学校、貧困地域の子ども支援のために市民が運営しているヘソン地域児童センターを訪ねた教育視察の折である。ともに印象的だったのは、地域住民が社会をつくる当事者として教育を考え、意志決定の過程に子どもや女性が参加しているという点である。「教育には、地域の中で多くの多様な市民とともに学んでいく体験が必要」というソウル市長の朴元淳さんの言葉が、これらの教育施設と「ろうそく革命」に重なった。

この「ろうそく革命」によって、朴槿恵前大統領は有罪となり、新しい政権が誕生した。市民による平和的な行動により社会を変えていくという「ストリート・デモクラシー」の力、民主化を自分たちの手で勝ち取った韓国の人々の力を目の当りにし、韓国には学ぶべきことがとても多いと感じた。

その韓国を再び訪れ、韓国の方々と交流する機会をいただいた。



光化門前のろうそく集会

デモを楽しむ人々、民衆のダイナミズム

韓国の市民団体「参与連帯」は、「ろうそく革命」を主導した団体である。「権力に対する監視と牽制」をおこなう「番人」として、市民の参加を根源として活動をしているとのことだ。

「参与連帯」幹事の沈さんは「民主主義や人権が脅かされそうなとき、政治がおかしいと思ったとき、声をあげなければ社会は変わらない」と語った。「韓国国民は人権侵害を受け、それと闘ってきた長い歴史がある。民主主義を自ら勝ちとる闘いの中で、怒りで立ち上がっても、それをユーモアにかえて運動でき

るレベルまで力をつけてきた」という。体制寄りの大手メディアが取り上げない問題は、新しいメディアを使って、一般市民のコミュニティから情報を得て運動につなげていくとのことだ。「ろうそく集会」には、ソーシャルメディアによる呼びかけを活用し、1日で100万人が集まった。集会に集う人々は、個人や家族連れ、既存の運動団体だけではなく友人どうしのグループなど多様であり、多くの市民が自発的に参加している。大音響の音楽やプロのMC、歌やダンス、参加者の自作の旗やプラカードがイベントを盛り上げ、参加する人々が集会に集うことを楽しみにしていたという。2016年の集会の熱気、民衆のダイナミズム。日本に住む私には圧倒的な距離感があった。2019年香港の民主化デモも韓国の運動を参考にしているとのことだった。

次世代に繋ぐ韓国の民主化運動

韓国と日本は民主主義を獲得した歴史が異なる。日本の植民地支配からの解放を求めて朝鮮民族が立ち上がった「3・1運動」にはじまり、韓国の民主主義は、多くの民衆の犠牲の上に成り立っている。80年代の民主化闘争を自らの手で勝ち取り、民主主義と自由を守る不断の努力を続けてきた。正しい歴史認識、政治的な知識、批判精神を持たなければ、簡単に操作される対象になってしまうことを、韓国人々は身を以て知っている。1991年に、金学順（キムハクスン）さんらが、日本軍「慰安婦」であることをカミングアウトした行動の背景には、紛れもなく韓国の民衆による民主化運動があり、現在の性平等が欠落する「民主主義」を完成させるための韓国の#MeToo運動や民主化運動へとつながっている。韓国では、矛盾した体制に抗議し、市民の手で政治を変えていくという意識と力が若い人たちに確実に繋がっていた。

「ナヌムの家」という原点

就職して間もない頃、職場の同僚とドキュメンタリー映画「ナヌムの家」（1995-1997 ビョン・ヨンジュ監督）と、『彼女の「正しい」名前とは何か』（岡真理：1999「現代思想」）という論考を題材として学習ゼミを行った。私はその時、はじめて（と言っている）日本軍「慰安婦」について知った。衝撃だった。日本軍「慰安婦」の方々が半世紀にも渡り沈黙を強いられてきたこと、被害が「犯罪」として「問題化」されることもなかったこと、何より、私の受けた教育の中で事実を知らされなかったこと。日本軍「慰安婦」問題は、「国民国家」、「家父長制」、「ジェンダー」をめぐる根源的な問いをつきつけた。しかしそれは同時に、自分の抱えて来た問題意識を解放し、自分に内面化されたジェンダー規範を考え続け、自分を拓くために核心ともなる論点との出会いだった。私はこの時から、「ジェンダー」「ポストコロニアル」について学びはじめた。その原点とも言える「ナヌムの家」！

顔が見える、名前のある人々

「ナヌムの家」は、畿道広州市、ソウルから車で1時間半ほどの田園の中にあった。日本軍によって性奴隷の被害を受けた女性たちが共同生活をしているが、現在、「ナヌムの家」で生活する被害女性は6名ということだった。高齢になる被害女性たちには残された時間が少ない。矢島幸さんという日本人スタッフが通約をしてくださり、李玉善（イオクソン）ハルモニが被害証言を語ってくださった。被害者であるハルモニが存在し、被害を語ってくださること。その存在のインパクトはとても大きい。ハルモニは「日本人を恨んではいない。平和な社会のために、加害の事実を否定する政権を変えてほしい」と語った。「ナヌムの家」の歴史館には、ハルモニたちの「慰安所」での生活、恨（ハン）、希望を描いた絵や、



ハルモニの生涯の説明と遺品が展示されている。被害女性たちの多くは字が書けず、その壮絶な経験を絵で残した。心理療法の一環でもあるとのことだった。元「慰安婦」の女性たちには、本当の名前があった。顔が見える、名前のある人たちだった。ハルモニたちは、日本政府の釈明、歴史問題の認識、権力の強要に抗える力をつけることを強く訴えていた。

写真左 「ナムムの家」で共同生活をされていたハルモニの胸像

写真右 「ナムムの家」に展示してある元日本軍「慰安婦」の方の描いた絵

この国の主権者として問われていること

元日本軍「慰安婦」の女性たちは、今なお、加害の事実を認めない日本政府と日本社会に対して、30年に渡って被害を訴えてきた。その影には、家父長制ジェンダー規範の軛から逃れることが出来ずに名乗り出ることが出来なかった方々もいる。「慰安婦」制度は日本軍の組織的な性暴力のシステムであり、貧困や社会の諸矛盾を女性に負わせることで体系化された性奴隷制である。しかし社会は、元「慰安婦」の声を、「時代」のせいにして、あるいは「金は払った」と封じ込め、レイシズムと性差別の共犯によって無視し続けて来た。日本軍性奴隷問題は、日本軍によるアジア太平洋への侵略戦争と植民地支配に対していかにして責任を取るのかという問題と、女性への性暴力という人権問題が輻輳している。

李玉善（イオクソン）ハルモニの、「日本人を恨んでいるわけではない」という言葉に安堵している場合ではない。何十年も何十回も被害者に同じ訴えをさせ、何も変えられていないという事実。根底には現在に続く問題があり、それは、この社会を生きる上での矛盾や葛藤、生きづらさと分かちがたくつながっている。

日本では、加害の歴史教育が充分に行われず、主権者となるための政治教育は警戒され、セクハラ・性暴



力を容認し、女性差別や人権侵害に鈍感だ。加害の歴史と、内なる植民地主義を知らなすぎ、政治に無関心な人はとても多い。歴史は、過去を過去としてではなく、現在を問うためにこそある。わたしたちは、この日本の主権者として責任を問われている。

教育は何を伝えてきたか

このツアーに参加する頃日本では、日韓関係が深刻な状況だと言われ、根拠のないバッシングやレイシズムを政府もメディアも煽り、「今、韓国に行くのが危ない」と言われていた。韓国を訪れるとまったくそんなことは感じられなかった。ツアーの中で強く感じたのは、私を含めて「日本人は、加害の事実を知らなすぎる」ということだった。正しい歴史認識があれば、反韓・嫌韓を煽る政府やメディアに踊らされないはずだ。

なぜ日本政府がこれほどまでに、韓国の大法院における徴用工判決を批判し続けるのか、日本軍「慰安婦」問題を解決済みとしたいのか、そして加害者である日本が、あたかも被害者の立場にすり替わろうとするのか。今回のツアーで明らかになったことは、日本では第二次世界大戦後、一貫して朝鮮侵略と植民地支配の責任を正面から問わず、民族差別の克服をしてこなかったということ。この事実を十分に認識しなければ、韓国との真の友好関係は築けない。教育は、正しい歴史を伝えなくてはならないと思う。



「植民地歴史博物館」

「伝えたいこと」にあふれた人々

今回のツアーで大変お世話になった、李善姫さんは日本語がとても堪能な方で、移動中のバスの中や各所歴史博物館で、韓国という国の成り立ちや日本との関係や歴史を、ご自身を含めた一般の市民の感覚を交えながら教えてくださいました。韓国のNGO「民族問題研究所」の対外協力室長の金英丸（高知のヨソ様）さんは、強制労働被害者の尊厳回復のための活動、日韓市民の交流の橋渡しを長い間続けて来られた方で、日本人の認識しない日本の歴史を教えてくださいました。活動をしながら日本に何年も滞在されていたとのことで、とても日本語が堪能な方だった。「ナムムの家」で案内をしてくださいました矢島幸さんには、日本軍性奴隷制問題について教えていただき、背景にある日本の「ジェンダー」「植民地主義」「主権者」

意識の不十分さについての指摘をいただいた。韓国語やドイツ語など数か国語に堪能とのことだった。

ツアーでお世話になった方々はみな、伝えたいこと、語りたことに溢れていた。

そしてふと、外国語で“話す”ことについて考えた。わたしの経験で考えると、「話したいこと」がないと外国語は“話せる”ようにならない。というか会話にならない。現在日本では、“グローバル化”に対応する人材育成のために、小学生から英語教育が始まっている。しかし、外国の人を前に、正しい自国の歴史を知らないまま“話せる”ことがあるのかな、と思う。ましてや“世界”で何を語るのか。自分の持っている歴史観や社会観の枠組みの中で人は考えるのだから、これが歪んでいたり狭量であったりすると、どんなに真剣に考えても本当のことは見えてこない。ほんの些細な出来事、それをめぐる会話、言葉のやり取りにも、歴史観や社会観は考え方の決定的な枠組みとして表れてしまう。外国で“話せる”ためには、相手の国や自分の国の歴史、文化、社会の成り立ちを含めての学びが必要だ。歪んだ歴史教育、規律を守らせるための道徳教育は、外国語を学ぶことと大きく矛盾する、と思う。

顔の見える個人として

今回のツアーでは、ツアーが終わってからも大変に多くのことを学ばせていただいた。今後も、韓国の方々とは、個人の思いとは別のところで「和解」をすすめるようとする国家の強権に絡めとられずに、顔の見える個人として対話を続け、交流したい。国境を越えて、差別や人権侵害とたたかい、お互いを支えあう関係になれたらと思う。近いうちに、また韓国を訪れたい。



日本大使館前「平和の少女像」